〔講演会〕

私の父　本間喜一を語る

本間喜一長女　殿岡晟子

【司会】 続きまして殿岡晟子先生より「私の父本間喜一を語る」という題でお話しいただきたいと思います。殿岡先生、よろしくお願いいたします。

【殿岡】 殿岡でございます。こんなに大勢の皆様に父、本間喜一のことをお話できますのは、大変に光栄に存じます。ご当地の言葉で申しますと「ババアのだんべい話」かも知れません。私が昔のことをどうしてよく知っているかと申しますと、私は医療ボランティアをしておりまして、お年寄りをボケさせないようにしてゆくのは、その老人の過去を調べ、生きていらした、過ごしていらした話を伺い、本人の人生の得意な時代の話は何回でも聞いてさしあげることでした。よく家人は「その話、もう何度も聞いたわよ」と、老人の話題を切り上げることが多々ありますが、あれはいけません。何回も何回でも聞いてあげて、その方の良い時代を彷彿とさせてあげるのが、年寄りをボケさせない一つのコツだと思います。

父は生きておりますと、119歳になります。亡くなりましたのは95歳と10ヶ月でした。長生きでした。私は父を絶対ボケさせてはならないと思いまして、父の生活に自分の人生を使っても、それでよいと考えました。これは誰からの命令ではなく、父のそばにいて一緒に行動をしているうちに自然と沸き上がって参りました私の気持ちでございました。

本間喜一、本間喜一と申しましても、どんな格好で、どのぐらいの背丈で…と皆様にご理解していただくために、私は数字を持って父の姿をお教え申し上げます。まず背丈ですが、1m82cmくらいはゆうにありました。石原裕次郎ではありませんけれど、股下が長く、つまり足は長かったんです。非常に格好の良い恰幅のよい紳士でした。昔のパスポートは、目の色まで書く欄がありましたが、父の目の色は「ブラウンアイズ」と書かれております。茶目ですよ。髪の毛は、すこーしですがウェーブがあり、日本人特有の黒い剛毛ではなく、やわらかい毛髪でした。色白な肌理の細かい肌は、男にしては勿体ないようでした。威風堂々として外国人と並ばせても引け目を感じさせません。鎧を着せたらどんなに似合ったでしょうか。子供の頃は大きい方ではありませんでしたが、遺伝的なものもあって中学2年生くらいからどんどん伸び出し、中学を卒業いたします時は、一番後の列に立つようになったと申しておりました。父の母の家系は、祖父をはじめ家人全員大柄な人間ばかりで、上杉様が米沢に入城なさる以前に当地に住んでおりました。豪族で家とは呼ばず館(やかた)と呼んでおりました。上杉様に杉5,000本や土地などを差し出したものですから、苗字帯刀御免となりました。

父は足が大変に大きく「11文半甲高」。現在の大きさにいたしますと28cmくらいになりましょうか。ここに父が18歳の時、第一高等学校1年生時代の日記がありますが、「明日、行軍が有る

ので友人と足袋を求めに行くが、上野から本郷、谷中、足袋を求めて歩いたが本間の足に合う大きさの足袋はなく仕方なく靴下を求めて寮に戻る」と、書いてあります。母は父の足袋を求めるのは、あのお相撲取りのいる両国に参って買ったそうです。父の体重は80kgはたっぷりあり、ブクブク太りではなく、必要な場所に筋肉のしっかりついた大男でした。

父はお寺の娘でした祖母に幼い時より育てられました。寺の娘ですからその当時としては学問がありました。もちろん田畑の仕事はいたしません。自分の趣味である染織に没頭研究しておりました。自室のある２階の室に父を遊ばせ、階段から父が落ちないよう階段の戸を引き、パッタンパッタンと機を織っておりました。（私は彼女の作品である目くら縞に、父の名前や扇子、瓢箪などを織りこんだ藍染の風呂敷を大切にいたしております。）子守をしながら幼い父の生来の性質をみていたのでしょう。また、お風呂に入ります時は、まだ風呂の底に足の着かない父のため、自分の両手で父の首を支えながらお湯の中で論語の一部を口伝えに教えてくれたそうです。毎日のことゆえ、いつの間にか父の頭の中に入り、論語が染み付いておりました。大きくなり東京の第一高等学校在学中論語の時間があり、父は「ああ、ばあさんが教えてくれたのは論語であったのか」と思ったそうです。湯につかりながら台所の方を眺めますと、天井から塩鮭がぶら下がってまして「正月になったら食べるんだなあ、早く正月が来るといいなあ」と思っていたそうです。

夜分、回り持ちで近所の子供達は一箇所に集まり勉強することがありました。囲炉裏で、杉の枝葉をさっと一人が火にかざすと、ボボボッと周りが明るくなり、皆で本を見たそうです。もちろんランプはありました。玄関の上の室が父の勉強部屋でしたが、ランプを使うときは母親から火事にならぬよう厳重な注意を受けたそうです。朝読みってありますね。学校へ行く前に早起きして読本を声に出して読み上げるのです。それをいたしますと、おばあさんがご褒美に銀の小粒をくれたそうです。また、おばあさんは「お前が中学生になってよく勉強したら、今度は金の小粒をあげる」と申したそうです。

小池という名前が本間の養子になる前の実家の名前ですが、米沢藩の士族でした。藩の命令通り非常に質素に暮らしておりましたが、当地上杉神社のお祭に、母親が父を連れて峠を越え城下に参りました。いつも質素にしている母親が「ほーら、欲しいものがあったら買え。食べたいものがあったら食べろ」と申して、どんどんお金を使ってくれるんですって。こんなにお金を使って、子供心に大丈夫かと心配したそうです。見世物の中には覗き眼鏡なぞありまして、『曽我兄弟』の物語の人形劇などは、「現代で言えばテレビの人形劇と同じだよ」と父は申してました。手品、百面相など、もう楽しくて楽しくて我を忘れて米沢の城下町を遊び回っておりました。が、そのとき、大通りを２頭立ての馬車がパーッと走って来るんです。何だろうと思って見ましたら、馬車の中にナポレオンがかぶっているみたいな帽子をスッとかぶった人が座っているではありませんか。「お母さん！ あれは何ですか？」と聞きました。母親は「あれは天子様のお遣いで、勅使といい、神社にお参りにみえた方だ」、「ふーん、格好良いじゃあないか！ 大きくなったら、僕は勅使になるぞ」（つまり勅任官です。）それからの父は、目的を持ち勉強しだしました。勉強って理解できるようになると、ますます面白くなるんですね。小池の家はあるときは学校だったり、郵便局や役所など一軒の家で何でもあつかっていた時がありました。おばあさんは褒めてくれますし、成績が上がりますし、楽しかったでしょう。どんどん勉強して、小学校４年生の時は、当時の知事様から表彰状と硯を頂戴いたしました。うれしかったのでしょうねえ、父は大切にしておりました。私も現物を見たことがあります。

学校の先生方も家族も、父を東京の学校で勉強させたほうが本人の将来のためになるのではないか、と考えるようになりました。父親の弟で東京にいる則忠叔父の所へ、父は13歳の時に勉学のため上京することになりました。この叔父さんも東京で勉強した人で、玉庭の本間という家に養子に行きましたが子供がいませんので、父が叔父さんの養子にと考えられたのです。小学校6年が終わってから上京しました。玉庭から米沢まで歩き、汽車に乗りました。車内は畳が敷いてあり、父は東京までの停車する駅の名前をノートに書き付けたそうです。田舎なまりの言葉に苦労したそうですよ。

東京に住むようになりましたら、叔父に「子供がお金を持つ必要はない」と言われ、玉庭で毎年、桑の葉を集め農家に買ってもらって少しずつ貯め貯金した通帳を取り上げられてしまったそうです。ですから、中学ではテニス、野球、剣道など用具にお金の掛かる遊びは、叔父さんに「お金ください」と申し出るのが恥ずかしく、道具のいらない身ひとつでできる鉄棒をすることにしたと申してました。鉄棒にぶら下がり、大回転とか空気飛び、懸垂など見事な技を披露したそうです。体格は筋肉隆々になりました。友人達からは文武両道だと尊敬されるようになったと申しておりました。父はいつも「僕の身体を作り上げたのは、鉄棒のおかげだよ」って申してました。

通学の道順に（現在でも東京で有名な場所ですが）神楽坂という所があり、粋筋の女性が店を構えたり、江戸時代からの生活用品を作り売る店もあります。父は決して叔父の家が肌に合わないわけではないのですが、なにぶん子供のいない大人だけの家庭は、父にとって淋しかったのでしょう。帰宅時間をなるべく遅くするために、神楽坂の町をあちらの店先、こちらの店先と見物しながら家に帰ったそうです。その中でも父が一番気に入った店は、豆腐屋でした。湯葉の作り方など見てるだけですが、全部空で覚えたそうです。

父が一番叔父の家で辛かったのは、食事の時に茶碗を胸元に付けて食べるのが悪い癖だから直さなければいけないということになり、赤ちゃんのよだれ掛けと同じものをブリキ板で作り、紐で首に掛けられたそうで、茶碗がぶつかるとチーンと音がする、あわてて茶碗を胸元から離す。何回か繰り返し、食事のたびに父は淋しくいやな想いをしたそうで、夜、布団を頭から被ると、涙が止めどなく流れたそうです。その時、父は「自分の子供は、たとえ橋の下で雨風を凌ぐような貧しい生活であっても、自らの両腕から離しはすまい」と誓ったそうです。夏休みになると父はパーッと山形へ帰りました。帰り道、遠くに母親が立っている。峠の中途まで迎えに来ている。お母さん、どうしたんだ？もしかしたらキツネが母親に化けて出て来てるんではないか、と思ったそうです。「お母さん、なして来た？」と聞きますと、「いや、ここに用事があってな」と答えたそうです。そんな用事はありやしない。ただ息子喜一が帰ってくるのに一刻も早く会いたかっただけなのです。親子2人並んでとぼとぼと峠を歩きながら「お前はな、頼んで養子になったんじゃあないんだから、辛かったら、えらかったらいつでも戻ってきていいんだからな」と言われたが、しかし「辛いんだ、夜、布団の中に入ると涙が止まらなく流れるんだ」なぞ口に出せば、お父さんと叔父さんとの仲が悪くなったら困ると考え、ぐっとこらえ、「ううん、楽しくてみんな親切だ」と母の顔を見ずに答えるのでした。

成績がいいとお母さんが非常に喜んでくれるので懸命に勉強をする。良い点を取ったテストペーパーは、全部山形に送りました。勉強するから成績は上がる。ノートでも何でも玉庭の家に残っていました。これは家が大きいからできることであって、現在のモダンな家屋では到底できるものではありませんし、残そうとする親の気持ちが、今こうやって皆様の目に現実にお見せできるのです。

敗戦後、父が玉庭の家に参りましたら、鎧がないのです。おかしいと思い、聞き質しましたら、英文で書いた紙を持った人物が来て、アメリカからの命令だとか言って持ち去ってしまったとか。そんなことありえないんですが、騙されたんですね。また小池の家には、日本最初の新聞『萬朝報』が第1号から取り置きしてありましたのを、紙屑の値で売り払ってしまいました。父は大変に残念がりました。その後は父は家人に「家の中のものは一切外部に出すな。もしも大学や研究者が来て古いものが見たいと言っても、写真で撮っていけばいいんだから。外へ出したら2度と家には戻らないよ」と申しつけました。ですから今、皆様にいろいろお見せできるのも、その時の父の教えが守られていたからだと考えます。

東京で一番好きな勉強は数学だったそうです。数学は問題を解けばいいでしょう。数学だけは中学では先生よりできたそうです。父は本屋の丸善へ行き、『スミスの代数』という赤い表紙の本を求め、ひとり自分だけ机に向かって勉強していますと、教室の黒板にはギッチリと数字が書かれてクラスメイト達と先生が「おーい本間、すまないけど教えてくれ」と声がかかる。父は黒板の前に行き、間違いを指摘し、正しい解決を書き込むそうです。(嫌味な生徒じゃありませんか。)父はよく私に申しました、「もしも理解できなくなったら最初へ戻れ。最初からやれば分かってくるんで、途中で分かんないからって止めたり、先に進んだってしょうがないんだよ。土台をやらなければしょうがない」と。で、第一高等学校に入学するときは数学は一番でした。帝国大学に入学するときは無試験でした。成績が良かったからですかね。本当は父は理数系を勉強したかったのですが、山形の父親に法律を勉強するように強く勧められました。当時は「華(はな)の獨法(どっほう)」と呼ばれてました。

東京に住んでおりましても、私は米沢に全然関係ないんじゃあないんです。私はどちらにしても半分はこの土地の血の流れる人間なんです。私の母が結婚相手に2名の男性を並べられました。一人が本間喜一、一人が北沢敬二郎。この北沢敬二郎という方は米沢出身で、大丸デパートの社長にまで出世なさった方です。父は法律、北沢さんは文学部。母は北沢さんのほうがロマンチックじゃないかと考えたのですが、父親に法律の本間と結婚するように命じられました。私も次兄もこの話を聞きました時、「ワーッ、大丸の社長のほうが良かったのに…」と申してしまいましたが、居合わせた父の苦笑いしていた顔が、忘れられません。父、本間喜一が申しますに、結婚は自分ひとりが良くてもダメなのだ。自分だけのものではない。代々優秀な血が流れてほしい遺伝を考えると、変な病気が入り込んでも困るからと申して、母の家は東京なのに、母の父の出身地の九州まで自分の足で行き、全部調べて「ああ、これなら結婚しても大丈夫」と安心したそうです。仲人口なぞ信用しない父でした。

父は帝大を卒業の時、ちょっと油断をしたら、大の仲良しの田中耕太郎さんに1番を取られてしまいました。悔しかったのでしょう、卒業と同時に受けた高等文官試験(役人の試験。今の司法試験)を頑張りましたら全国1番になりました。今回は田中耕太郎さんが2番になりました。彼とは一高からのクラスメイトですから、大の仲良しでございましたし、また良き碁がたきでもありました。だいたい司法試験の点数の順番で、昔は鹿児島に赴任なさった方はビリのほうでしょうか。何ですか東京から離れるほど点数が悪いのです。田中さんも父も東京に残りました。一番と二番は東京に残されるのです。

裁判官になりました。その時の上役の方が三淵忠彦とおっしゃって、あの有名な戊辰戦争の時、会津藩の城代家老でいらして、殿様の代わりに切腹なさった萱野権兵衛様の孫に当たる方でした。三淵様は父より10歳年長でしたが、父を大変に可愛がってくださり、また目を掛けていただきました。大学出の木訥バンカラの父を、公私共に武

士道に繋がるしっかりとした日本男性に仕立ててくださったのです。仕事が終わると「ちょっと晩飯を食べていかないか」とお家に呼んでくださる。大したご馳走は無いんですって。お豆ご飯とお汁と煮物ぐらいだったが、その季節に合った暖かい心のこもった食事が、お酒と共に三淵先生の会津なまりのおもしろい話と共にいただけたと。その笑いの食卓のうちに、裁判所の人間関係や、人への思いやりなどを教えいただいたと申しておりました。三淵先生のお名、忠彦を自分の長男につけたことでも、父がどんなに三淵先生を大切に思っているかわかります。ある時、散歩をしていたら、向こうから三淵さんが歩いていらした。「やあ、先生」と言ったら、「家へ遊びに来い」っておっしゃる。「じゃあお供します」と父はくっついて先生の後を行った。三淵家のお玄関に着き、さて家の中に上がろうとした時、先生は振り向いて父に「君、着流しで人の家へ来るもんじゃない」とおっしゃった。「おいでっておっしゃったのは先生じゃあないですか」と父は言ったんですが…。そこで父はどんな時でも人の家を伺う時は袴をちゃんと着けて参上するものであると覚えたのですよ。「羽織、袴」は一対のものなのですね。

3年くらい裁判所で判事や検事をしながら法律の勉強を続けておりましたが、原告を前にして、こう言えばあいつは泥を吐くんじゃないかとか、こう言ったらあいつは「恐れ入りました」と頭を下げるのではないかとか、何かそうした人を裁くということが嫌になってしまったと父は申します。「法律」って何だろうと考えた。形が無い、触ったって何も無い、味も無い、臭いもしない。なぜそれなのに皆が一生懸命守って律してるんだろうと。ああ、もっともっと勉強したいと思い、上役の三淵先生に心の内を申し上げました。先生は「うん、それでは大学の先生になれよ」とおっしゃって、帝大の先生でいらした三潴(みつま)教授と計らい、父を一橋の先生にしてくださいました。父は小学校を1歳早く終えてましたから一番最初に受け持ったクラスの生徒さん方とは3歳しか違わなかったらしく、昔の書生さんと申しますのは、髭をはやしていたりお年を召してたり、何か学生達が恐かったと申しておりました。一橋ではよく研究をいたしておりました。六法全書という法律に関する字引みたいな本がありますが、父はそんな大切な本の編集にも携わっております。一橋の学校は宮城のちょっと横、武道館の前に一橋と呼ぶ地下鉄の入口あります。今現在は如水会館が建っております。

父が奉職いたしました時は、専門学校でしたから、大学法令により、大学に昇格することになりました。帝大（東大）と一緒にしてしまうという噂が出て、まあ火の無い所に煙は立たずという諺もありますが、学生達の合併反対騒ぎが起こりまして、ものすごい騒ぎ方をしたらしく、警視庁から巡査達が来る。学生とお巡りさんとのぶつかり合いですよ。ぶつかって学生30数人が警察に引っぱられてしまいました。父はその時、学生部長です。心配しましてね。昔の警察でございますから、今と違って連行されたら、ぶん殴られて蹴っ飛ばされてもしょうがない時代でした。たぶんひどい目に合ってるんじゃないかと思って皆心配したんです。父はその時考えまして、警視庁出入りのそば屋から天丼の特上、エビが2匹ピッと丼の縁から尾っぽの出ている立派なのにお吸物とお香香が付いた品を30数個、差し入れしました。後で食べ終わった食器を調べましたが、全員きれいにエビの尾っぽまで食べておりました。父は「ああ、これは大丈夫だよ、怪我もそんなにしていないし、これだけ飯が食えてるんならぶっ叩かれてないよ」と。それはそうでしょう、昔は幼稚園に入ったお子様が大学生になるんですから、いいお家の方が多いんです。警察だってそんなにヘマはできませんから、ぶっ叩いてもいなかったらしい。それに卒業なされば、いずれは自分達より身分の良くなる方々ですものね。また一橋は土地柄、宮城のそばであり、陛下のお膝元で騒いで何

事だと、両方まあ引き分けになったんですが、父が学内に戻ってきましたら門にいた小使いさんが飛びついてきました。「先生、どうしましょう。乱闘の際、学生達はお巡りさんの帽子を40個ばかり取っちまったんです。これはいかがいたしましょうか」と。「今さら返しに行ってもまずいし、燃しちまえよ」と父が言いました。門番が燃したんですが、帽子に付いているマークは金属でできていますから、ひと山ほど焼け残ってしまい「先生、どうしましょう」、「そんなの穴掘って埋めちゃえ」。で、埋めてしまいました。

この様に父は学生に愛され、学校から信用されました。国立(くにたち)に大学をつくり、一橋が大学に昇格した時は図書館長でございました。非常に勉強をいたしておりました。文部省からドイツへ留学に行くように言われ、ドイツに参りました。ドイツは当時第1次世界大戦後で、まだ敗戦のごちゃごちゃの時でした。インフレも凄まじい時でした。日本の文部省より送ってくださるお金は、当時のエーベルトドイツ大統領の給料より高いお金を頂戴したそうです。お金持ちとはこんなにいいもんだと初めてわかったと申しておりました。

父は男爵夫人の家に下宿いたしました。日本の戦後を考えてもわかりますが、男爵夫人も生活に大変でいらしたのでしょう。父は老貴婦人にとても可愛がられました。「本間は話す言語はつたないが、読む本は大変に難しい本を読みこなす」と尊敬されました。父は、老婦人の気持ちの暖かさに山形の母の姿を重ねていたのではないでしょうか。男爵夫人は日本人の父にただの下宿人としてではなくナイトの、いわゆる西洋の紳士の教育をなさってくださいました。ですから日本では三淵先生に男としての振る舞い方、ドイツでは女の方を扱う術を覚えて参りました。ナイトの教育でございます。

物価インフレでひどかったそうです。だいたい1兆マルクでジャガイモを求めることもありました。1兆マルクとは0が12付くのです。それも毎日毎日値段が違ってくる。私は父に「父様、一番贅沢をなさったのは何でございますか」と聞きましたら、ベルリンフィルハーモニーの席を1年間通して買い切ったそうです、1年間ですよ。父の好きなオペラはタンホイザーです。時々お酒が入りますと歌い出すので、家中笑いに包まれます。

父がドイツに滞在中、日本ではあの関東大震災が起こりました。ベルリンの大使館に日本人達は集まり、日本からの知らせを待っておりますと、日本では富士山は真っ二つに折れたとか、海に国が沈んでしまったとか、いわゆるデマが飛び交い、まるでお通夜のような顔を皆さんなさっていらしたそうです。やっと通信を受け、大丈夫だというニュースを聞き、安心したそうです。

父が紹介状を持ってベルリン大学の教授に挨拶に参りましたら、どこから来たと聞くので、日本からだと答えましたら、独り言のように「今度は猿が来るな」とつぶやいたそうです。また歯医者に参りました時には、医者が父の歯をみて「きれいな歯だね、立派な歯並びだ」と褒めてくれました。父は嬉しくて喜んでましたら、帰る時に「野蛮人は歯が丈夫なんだ」と申したそうです。ヨーロッパの国々の方々は、東洋人を一段下に見ていたのです。ベルリン大学に参った日本人で留学生割引のテストに受かった留学生はおりませんでしたが、父はベルリッツと申す語学の学校に参りドイツ語を身につけ、ドイツ語の留学生学割のテストをトライしましたら見事に合格し、それからはドイツ人の学生と同じようにすべてが半額学割で済むようになりました。これは大学生活の父にとり大変に助かりました。法律の勉強はすでに日本で勉強研究済みの講義ばかりなので、父はラウドブリヒの法哲学の本を求め、自分で研究したりベルリン大学の先生と話し合ったりして、楽しく勉強をいたしたそうです。もちろんお金持ちですから、バーでも美人達にもてたそうです。これは本人の口から聞いています。

ドイツの次に文部省からフランスへ行って勉強

をするよう、次にはイギリスに行って勉強するようにと申し渡され、父はそれぞれの国で法律の勉強をして日本に帰って参りました。帰国の際、母にダイヤのリングを求めてあげようと思い、オランダのアムステルダムが世界で一番ダイヤの取引の店があるので、アムステルダムの店へ参り、ダイヤを欲しいから見せてくださいと申しましたら、奥の室に案内され、机の上にザラザラと袋からダイヤを並べられました。父は「私は日本人で日本のワイフに土産に一つ指輪を求めたいのだ」と申しましたら、店のマスターは「あなたはバイヤーの方ではないのですか、大変にご立派なお姿なので…。私共は問屋ですからあなたがおっしゃる品はこの町の小売の店を紹介します」と。父は教えられた店で母にダイヤモンドの指輪を求めて帰国いたしました。「あんな大量のダイヤモンドを見たのは、あの時だけだったよ」と年をとった父は手振りをつけてたびたび話してくれました。

日本に帰国いたしました父は外国での勉強、研究の成果を論文に書き発表いたしておりますが、あの大正時代に、父の論文の一つに、女性を男性と同格、平等に扱うべきであるという記事がございます。父は今の言葉で申せば「イクメン」でした。私の赤ん坊の時は、大学から帰りますと、女中に私の離乳食のメニューを聞き、足りない食品を調べ自分で台所に立って野菜スープなどを作り、私に食べさせてくれました。もちろん、お風呂は父の独壇場でした。なにしろ手のひらが大きく赤ん坊の両耳を完全に押さえて、湯が耳に入る心配がないのですから。ちょっとした虫歯の手当も上手にしてくれ、私達は夜中に歯痛で苦しむこともありませんでした。

エリートコースを約束されている父は27歳の時に結婚いたしました。米沢閥のかたがたから結婚話が種々ございましたが、父は岳父の、つまり嫁さんの父親の縁で出世したと思われたら嫌だと。全然畑違いの家の者と結婚するのだと。自分の腕一本で世の中を堂々と進んで行くのだという考えが父の気持ちでした。米沢ご出身の結城豊太郎さん、日銀総裁などなさいましたね。そこの令嬢を押しつけられそうになりましたが、それを断ったんですよ。結城家には5人娘さんがおありだったとか、それで帝大出の優秀な卒業生からお婿さんを選んだそうです。父にとおっしゃった娘さんは、後に商大出の方と結婚なさったそうです。男の方は結婚相手によって人間性が変化するなどと世間ではよく申され、奥方との日常の生活によって確かに良くも悪くも変化する男性は多いようですが、ここで皆様に本間喜一が選んだ女性についてお話いたします。大友宗麟の一統で大分の鶴崎の海辺に逃げて隠れておりましたが、人品卑しからざる武士の一族がいると細川藩に知ることとなり、客員待遇で、一族郎党お世話になることになりました。ですから、この間まで一族の長は年の暮れになると、細川家へご挨拶に参っておりました。母の父は有名な英文学者で明治時代に神田錦町に英語の専門学校を作りました。日本の英語教育に大変力をそそいだ男でございます。彼は日本文学や中国の古典などを英訳しております。明治の世代に世界一周の旅に自費で参っております。祖父は子供の時に福沢諭吉先生のお書きになった『世界漫遊周』を見て、「世界にはこんなに多くの国がある。大きくなったら全部巡ってやろう」と思ったそうです。英国ケンブリッジ大の訪問帳には夏目漱石より先に祖父のサインが書いてあります。母はこのような有名な家に生まれ、父親の全盛の時に育っておりますから、贅沢といえば贅沢でございましたよ。家は千代田区麹町三番町、靖国神社の隣の広大な屋敷に生まれ育ちました。昔は今の英国大使館の横に女子学習院がありまして、母の姉は学習院を卒業したのですが、母はもっと勉強をしっかりとしたいと申して、お茶の水にある女子高等師範の女学校に参りました。この付属の女学校は普通の女学校ではございません。勉強ができなければ入学することはできないのです。いわゆる勉強をしたいお嬢様方の集

まりなんですよ。ＰＴＡで内閣ができるようなお家柄の令嬢ばかりでした。もちろん普通の家庭の娘さんもいらっしゃいましたが。横浜に三渓園という大きな庭園がありますね、私財をなげうって大きな庭園を作り横浜市に寄付なさった実業家、原三渓のお嬢さん。帝大の先生で『フランス大革命史』をお書きになった箕作元八のお嬢さん。宮内庁御用戸役のお嬢さん。それからこの米沢藩の殿様でいらっしゃる上杉憲章伯爵のお妹君、「大」という字を書いてヒロ様とお呼びする姫様も同級生で非常に仲良しでございました。父との結婚が決まりました時、母は「ああ嫌だわ、今度あなたに最敬礼しなくちゃあならないの？」と言って二人で大笑いしたそうです。お茶の水では英語は１番でございました。

当時は帝大の独法（ドイツ法律）の卒業生とお茶の水女学校の才媛の結婚が最高のカップルだと言われておりましたから、父と母はたぶん最高の組合せだったと考えます。母の母親は、文明開化のはしりに築地の外国人居留地にありました西洋人の作った女子の学校に、７歳でキンダースクールの部に入学、寄宿舎で生活をしました。自宅に帰るのは日曜日だけ、毎日の生活はすべて英語です。先生は外国人ですから、歴史、数学、地理、生物、国語以外は全部英語とフランス語だったそうです。16歳まで外国人と共に生活をしておりましたから、ハイカラな生活だったと考えられます。ご維新の後の大変な時によくよく先のことを考えたのですね。そうそう、祖母の家の財産管理をしてくださっていたのは、あのひげの山本直純さんのお祖父様で日銀総裁をなさった方だそうです。このような両親の元に育った母は、ハイカラな英国式の家庭生活を送っておりましたから、父との生活のギャップは大変なものでした。新婚そうそう仲の良い友人に宛てた手紙に「貧乏人の嫁になりました」と書いてあり、生前の父に読んであげましたら「ふーん、そんなこと書いてあるのか」と苦笑していました。いたしかたありません。有名な貴族院議員の一門の娘から見たらそんな思いがしたに違いありません。

父は九段の大神宮で式を挙げようと申し込みに参ったところ、父の結婚する日は吉日だったらしく全日ふさがっておりましたが、そこが父のうまいところで、神主に袖の下を握らしたんですって。で、前後の式を各々10分間ずつ削って20分間の空きをつくり、うまく式を挙げました。披露宴は帝国ホテルでいたしました。母は美人でございました。よく『婦人画報』の令嬢紹介に載っておりました。昔の女性にしては背丈のすらっとした、目の大きな女性で、父は「ママには着せがいがあったよ」と申してました。美しく装うのが好きな母と、美しく装わせるのが楽しみだった父との組合せみたいです。

また、父は勉強したい者が勉強するべきだと申しておりましたから、勉強したかった母は父の後押しで、勇気を出し、東京外国語専門学校に参り、ドイツ語を自分のものにいたしました。おかげでボランティアとして上智大学の目の見えない学生達に英語、フランス語、ドイツ語を使用して外書の音読をいたしておりました。また、エスペラント語は会長に推されるくらい上手でした。

父が上海にある日本の大学、東亜同文書院に参る事が決まり、玉庭の母親に挨拶に参りました時、母親は80歳を超してましたかしら、当時は日本から小作農の人々が一家をあげて満州などに開拓に出掛けていましたから、母親は勘違いをしまして、「帰ってこい、玉庭に帰ってこい。お前一家が帰ってきても何の心配もない」と言いながら窓をパーッと開けて、「ほれ見ろ、あの田もあの畑もみんな全部家の土地だ」と指をさしたそうです。父は困ってしまい「この仕事は天子様のご命令なのだ」と申したところ、やっと母親は安心したそうです。ですから「僕は勲章や銀杯などちょっとも欲しくないが、おっかさんが喜ぶから受け取るのさ」と申してました。母親を喜ばすことが父にとっての一つの人生の目的だったと思います。

私は77歳になりますが、今から65年前、玉庭で生活をいたしておりました。昭和20年の東京は毎日がアメリカ、イギリスの軍用機に爆弾を落とされ、毎日、火災で逃げまどい、住んで生活を営むには無理な状態でした。20年の5月3日、母と私は小松の駅頭にまるで外国人のような身なりで降り立ちました。音和屋旅館に宿り、玉庭の親類の家に疎開をするのですが、まず、小松で心と体を休ませておりました。玉庭では、父の里には病人がおりましたので、井上という親類の家の2階に住みました。家人は学校の先生方が多く、知的な家でした。大変にお世話になりました。私はすぐ勤労動員に借り出されました。大きな松が切り倒され、その後の根を掘り出すのです。これは飛行機を飛ばすためのガソリンが日本では足らなく、松根油が必要だったんです。出征兵士の留守宅にも働きに行かされました。田作りから田植え、草取り、稲刈りなど全部百姓仕事をいたしました。玉庭村の佐藤という家に茅を刈りに参った時のことです。仕事をしてましたら、窓が開いて品の良いお婆さんが私を手招きして「お前は喜一兄(あんに)やの娘(おぼこ)か？」と尋ねますから「ほだこて（そうです）」と答えますと、「あがれ（召し上がれ）」と柔らかいお餅を和紙に包んでくださいました。私は母がどんなに喜んでくれるかと、餅が固くならないように胸にしまって、母に食べさせてやったことを覚えております。ずっと後に父にこの話をいたしましたら、昔、小池の家から嫁に行った女性がいたそうで、親類だと申しました。さらにずっと後ですが、この方のお孫さんが愛知大学を卒業なさってます。

私は東京で乗馬もいたしておりましたから、馬に接することは慣れておりましたし、父の血が流れておりますから、器械体操も選手でしたので体力・気力も普通のお百姓さんの子供と何の変わりもなく、楽しんで仕事をいたしておりました。ある雨の日の朝、私が田んぼに行こうとしましたら、ちょうど玄関の上がり框(かまち)に母がおりまして、私の蓑傘をつけた姿をじっと見て「晟子、今までで一番似合うスタイルだわ、やはり血は争えないねえ」と申しました。私は悔しくて悔しくて…。その日の夕方、いつもなら泥を落としてきれいな姿で家に入りますのに、足にヒルを3匹も付けて帰りました。玄関で母を呼び、母の目の前で私の足に食いついたヒルを引っ張ってみせたのです。ヒルって伸びるんです。そして私の足の皮膚からおびただしい血が流れる。凝視してました母は卒倒いたしました。ちょっといたずらが過ぎました。

また、大変だったのは言葉です。子供ってうまいもんですよ。祖母と母の間で同時通訳をいたしました。祖母の顔を見て「……だべさ」と言うし、母の顔を見て「……あそばせ」などと喋る。父が上海から日本に帰るまでは、母の面倒を絶対に見ねばならないと心に決めておりました。また、このようなこともありました。小野川の温泉旅館に東京の下町の小学校が集団疎開をしておりました。その子供達の栄養補給のために私共は各自、3升のイナゴを集め提出いたさねばならず、私は大変苦労して集めたものですが、母がイナゴに大変に興味を示し、私の集めておりました袋を開いてしまったのです。部屋中イナゴだらけです。驚いた母は机の上に乗り、私が帰宅するのを待ち続けておりました。やっとイナゴを学校に提出してほっといたしておりましたら、母に「あれ（イナゴ）はどうするの？」と聞かれましたから食用だと申しましたら、「お前が食べたら一緒に寝ないわよ」と言われてしまいました。しかし、私がイナゴの足と羽をもぎ取り、アメと醤油で甘辛く炒りあげたイナゴの佃煮は母の好物になりました。母は「これは何？」と聞くので、「はい、エビでございます」と答えました。我ながらうまい返事だったと思います。母は「この辺（玉庭のこと）でエビが取れるの？」と申しておりましたが、知らないということは美しいことでございましょ。

敗戦のニュースは、村で一番大きな百姓で父の姉が嫁に行きました、苗字帯刀御免の中川家でし

た。大きなコロンビア製の蓄音機から流れ出る敗戦の御声に母の顔を見つめておりました。いつ東京に帰れるのかと。数日後、母に呼ばれて奥の間に参りますと、疎開の荷物の中から美しい絽の和服姿で座っておりました。「もっと近くに座りなさい。いいこと、私はロシア革命も知ってるの。第1次世界大戦の後も知ってるわ。だからこれから日本に起こることもうすうすは分かるのよ。でもお父様は上海でしょう。お兄様（長兄）は特攻隊でしょう。いつお戻りになるかは分からないわ。晟子と2人で過ごしていかなければならないかも知れないわ。でもね、卑しいことはやめましょうね。天下の大道を堂々と歩きましょう。分かった？」と申しました。気強な母だと思いました。敗戦後の日本でアメリカ、イギリスの人々に卑屈にならず、堂々と接し父に勇気と安らぎを与えてよきパートナーをつとめておりました。頭の良い女性でした。

私共は20年の12月29日、大雪の中を東京に戻りました。祖母の作ってくださった、味噌を挟んだお餅を胸に抱いて、母を汽車の窓から押し込み、混み合った満員の汽車で、焼け野原に化した東京に帰宅したのです。考えていたより早く、怪我をしてはおりましたが、空中戦で名誉の大怪我をした長兄も海軍病院より帰宅いたし、父も次兄も翌年の3月、上海より引き揚げて参りました。久しぶりに家族一同がそろいました。父は玉庭へ元気な姿を母親に見せに参り、戦時中、妻と娘が世話になったお礼を申し、久しぶりに母親の膝元で戦中及び引き揚げの苦労を癒しました。祖母は「喜一（きい）は甘酒が好きだったから」と申し、子供の頃の好物を作り、「食べろ、もっと食べよ」と勧めたそうです。何歳になっても、腰が曲がっても、頭がハゲても、母と子の愛情の交わりは変わらないものなのですねえ。

父も母も女中さんたちを大切にいたしました。その家の女中さんの手足に、ひび、あかぎれ、しもやけなど作っていたら、その家の主人の恥であると断言いたしておりました。玉庭からも来て下さいましたし、小白川からも来て下さいました。父は自分の子供のように可愛がり、私は姉妹のように親しみました。もちろん、その娘さんに合った勉強をさせ、女性のたしなみも習いに行かせました。本間喜一の家で過ごした彼女達の大切な若い時代が、いつも良い笑いの思い出としてあるようにと。

上海での父は自分の力を思い切り使い、当時有名な学者方を上海に呼び、集中講義をしていただきました。ですから、同文書院の学生さん方は、いつもおっしゃいますが、本当の勉強とはこれのことか、学問の真理とはこれか、など、先生が良ければ学生は食らいついて学びたくなるのですね。その教授のお一方に当地米沢出身の我妻栄先生もおいでです。

あの軍部全盛の時代、父は戦地に愛する学生達を送らねばならなくなりました。壇上から出陣する学生達に、「体を大切にして生きて戻って来て下さい」と申しました。しかし同じ頃、自分の息子がやはり出陣する時に上海から送って来た電報には、「先祖の加護を祈る」とだけ打って参りました。また、在学の学生さん達には「君達は負ける用意をしなければならない」とも申しました。上海では海外のニュースも聞けましたから、日本本国の方々より、世界の情勢がつかめたのでしょう。

上海では、中国人を大切に接しておりました。大学の門前に集まる乞食達にはお金を与えておりましたし、上海の家の女中さんでもある中国人女性は、日本が戦争に負けた時に父を隠すため中国服を作ると申して、父の体の寸法を取ったそうです。父に対してありがたい優しい気持ちを持っていてくれました。敗戦になり、上海市中、中国人が暴れ始め、日本人達が小さくなっている時、大学の門前に中国人の乞食達が大勢群れをなして押しかけて来たそうです。乞食のボスが父の前に来て、「先生には指1本誰にも触れさせないで先生

を日本のお国へお届けいたします。安心なさって下さい」と父に申したそうです。同文書院の先生の中には、町で殴られたり、唾を吐きかけられた人もあったそうです。

引き揚げと申しますと、惨めな話ばかりですが、同文書院大学だけは違います。敗戦の1年前から大学への送金は、日本本国から止まってしまいました。「勝手に食べて下さい」という話です。父はほら、若い時ドイツに留学をしてインフレの恐さを存じておりますから、紙のお金でなく、ゴールドと物品で敗戦の用意と心構えをいたしておりました。なんせ、学生達が戦地より帰り、大学の先生方とその家族の人数を考えますと、500名位の人間の生活を賄って参らねばなりません。それも、敗戦後3年位は日本に帰れないかもしれません。このような大きな計画を、志を共にした数名の方々と粛々と仕度をいたしました。お米は無論、味噌、塩、砂糖、小豆など、日本人ですから、畳、荷物を運ぶ代用燃料などでした。土地を売り、ゴールドバーは1オンスを93本で代金としましたが、戦時中の事故で、手に届きましたのは、30数本だったと父は申します。日本人が金の延べ棒など所有してますと、危ないので、父の知人の中国人に預け、毎日必要なだけお金に換えて来てもらいました。父がゴールドバーを預けた中国人は台湾の方でした。（当時は日本籍ですが）父の一橋時代のゼミの学生でした。彼は当時敗戦の2年前でしたか、上海市で浙江銀行に勤めていましたが、副業で闇物資を動かし、釘を多量に貯めたのはよいのですが、ある日火事で家が焼け、焼け跡には燃え残りの釘が山のように出てきた始末。すぐ日本憲兵隊に摘発され、銃殺にすると言い渡されました。「ただし、日本人の身元引受人があれば命は助けてやる。」当時は日本軍が恐ろしく、誰一人彼を引き受ける日本の知人はおりません。その時、彼の頭の中にひらめいたのは本間喜一でした。父は快く彼を助けました。日本憲兵隊長の前に進み、父は申しました。「この男は、私が一橋大学で教え、私のゼミの学生でした。彼が法律を犯したと言うのであれば、私の教え方が足らなかったのかもしれません。本人を引き取り、よく教えるつもりです。私はこの男の身元引き受けに参りました」。こんな経緯で、この男は父を命の恩人と心に定めたのです。中国人は恩義を大切にし、一生忘れないものを持つのです。ですからあの敗戦の最中、先生にはサラリーを出し、学生達にはお小遣いをあげられたのです。

父は米沢藩に伝わる小冊「糧飯の事」という飢饉に対する備えの心得を知っていたからでしょう。B1の足りない食生活は脚気になり、心臓を悪くすることなどは、小豆を食べるようにすると避けられますもの。運が良かったとしか申せませんが、父は敗戦の翌年の3月、全員を連れ、引き揚げて日本に帰ることができたのです。無論、同文書院以外の日本人達も引き連れて団長としての帰国です。また、父は同文書院の成績簿、学籍簿をうまく皆様の荷物の中に手分けして持ち帰りました。中国の役人に見つかったらば大変なことになります。父はその時は自分が責任を取るつもりだったと、なぜなら大学にとって学籍簿という品は、私達の戸籍謄本と同様なのです。東亜同文書院の学生さん方は、父のおかげで自分が会社に勤める場合も、役所に勤める時も、自分の身分をはっきりと証明できました。多くの外地にあった学校で学籍簿を持ち帰ることのできた学校は一校もございません。これは、父の学生達への愛情と思えます。父の意気込みで、学籍簿を持って来れたのです。私はいつも思うんですけれど、父の心の中には13歳まで生活をした玉庭での祖先代々の上杉武士・米沢の侍の教えが染み込んでます。下の者を可愛がり、上の者を敬い、父親は厳しく、母親は優しく、兄弟仲良くする、藩の教えそのものを大事に生きた人だったなと私は思うんですよ。約束を守るし、喧嘩したって相手に必ず逃げ道を作ってあげてましたし、怒ったとしても、相手がまた再び立ち上がれるような道は必ず開けて

おりました。武士の情の理(わか)る、温かい気持ちの男でございました。

母との結婚も父にとり大変に良かったと思います。山形だけの世界ではなくて、日本の隆々たる時代の上流社会の生活も知り得ましたから。結婚しました時の父の持ち物は、柳行李と股火鉢（書生火鉢と申しますが）1個と机と本棚だけだったと母が申しておりました。母は女中を指図して、父の柳行李の中よりどんぷく（綿入れ羽織）やドテラを引っ張り出し、ほどき、洗って片付けてしまったそうで、父はそれ以後、玉庭から送ってくるどんぷくなどは取り上げられないよう、注意したそうです。母が亡くなりました後、私は父に母のお召の着物でどんぷくを作ってあげました。たて縞の紫の濃淡のお召で作りましたドテラを着た父の姿は、粋な新派の役者のようでした。92歳の頃の父に、私は尋ねました。「父様、どうやって長生きおできになるの？」父はふふふんとおどけて、「馬鹿な子を残して死ねないよ」と答えました。で、私はまた父に尋ねました「父様60歳からお独りになっておしまいでしょ。何故、再婚をなさらなかったの？」と。父は真顔になり、私に顔を近づけて声をおとし、「あのなあ、お前のお袋にいじめられて、結婚は1度でこりごりだよ」って申しました。私の母の我がままさに大変だったろうと思います。本当は大変にご自慢のワイフだったんですが。

父が日本に戻りまして、まず第一番になしたことは、同文書院の学生達のための大学作りでした。たった半年間で、無一文で、大学を作り上げてしまいました。文部省の役人は、お金がなくても大学が出来ることを初めて知ったと申し、父を畏敬の念で見ておりましたよ。そうなんです。父の考えに同協して下さった大勢の方々の協力により、愛知大学は出来上がったのです。父の信用、信頼は大きなものでした。

本間喜一を表現するとすれば、父は時間をかけず、その時の一番良い方法で、一番確かな答を出せる実行力を持った、心の温かな男でございました。死の床にあってもユーモアを忘れずにおりました。家族が心配そうに父の顔を覗き込みましたら、「もう手遅れだよ」といたずらっぽい顔をしてくれました。明治、大正、昭和の日本を生き抜き、森羅万象を眺めてきた父の最期の眼差しに浮かぶのは、幼き時の四季様々な古里の玉庭であったと私は信じます。

今日はお暑い中、お出かけ下さりありがとうございました。

【司会】 殿岡先生、ありがとうございました。実はここで、先ほど殿岡先生のお話にもございました井上様がこちらにお越しになっています。井上様から殿岡先生に花束の贈呈がございますので。よろしければ前のほうへお越しください。どうぞ中央へ、こちらへどうぞ。

【井上】 どうもお世話さまです。

【殿岡】 敗戦の時はもうお世話になりましたし、あなたのおばあちゃまにもゲンノショウコをやかんで煎じたのをすぐ飲ませていただきました。

【井上】 ありがとうございます。

【殿岡】 そっくりよ、おばあちゃまと。こんなにきれいなものを頂戴して。

【井上】 父から本間先生とか殿岡先生のお話をよく子供の時聞かせていただいたんですよ。そして1度だけ本間先生が家に訪ねてきたことがあって、未だに玄関に立ってる姿をすごく私覚えてます。

【殿岡】 すごかったでしょう。

【井上】 すごかったです。こんな感じで…どなたが来たのかな、なんて思ったことがありました。今回こうやってお会いできることになってとても感激しています。どうもありがとうございます。

【殿岡】 ありがとうございます。

【司会】 井上様ありがとうございました。ではここで10分間休憩をとらせていただきます。